

アクティブ・ラーニング型授業について

生命の教育研究所 代表 出口 勤

1 はじめに

「アクティブ・ラーニング型授業をやろうと思うけれど、どうすればいいのかわからない」また、逆に、「アクティブ・ラーニング型授業に取り組む必要など、ないのではないか」というような、アクティブ・ラーニング型授業に関する声を耳にするようになってきました。このレポートは、平成28年3月に作成したものに加筆修正したものです。

これからは、日本の全ての学校で、アクティブ・ラーニング型の授業が行われることとなります。「私は、一斉講義型授業しかしません」ということでは、生徒がそっぽを向く時代がきます。一日でも早く、アクティブ・ラーニング型授業に取り組みましょう。

2 なぜアクティブ・ラーニング型授業なのか

なぜ、勉強しなくてはならないのか？このことを説明できない大人が、たくさんいます。その大人の中に指導者である教員が、多く含まれていることを残念に思います。教育の目的は、法律や学習指導要領に詳しく書いてありますが、私は、次のように説明してきました。

まず、2次方程式の解の公式や判別式など、一生使うことがないのに、なぜ勉強しなくてはならないのか。それは、数学に限らず、全ての教科に言えることですが、「正しく考える訓練」をするためです。「正しく考える」とは、「言語を使用して論理的思考をする」ということです。これが、勉強をしなくてはならない最も大きな理由です。人として生きるためには、「正しく考える」ことが必要だと思います。(発達障がいのある生徒は、映像による思考をしている場合があるようですが、ここでは触れません。)

次に、「気づく能力」を向上させるためです。「気づく」ためには、蓄えた知識や、それまでの日常生活での経験という材料が必要です。別々に蓄えた知識や経験が融合したとき、「わかった！」となります。つまり、「気づく能力」とは、「創造する能力」のことです。

もちろん、社会で生きるのに必要な知識を獲得させることも大切なことですが、とりあえず「正しく考える」ことができ、新しいものを「創造する」ことができれば、今までの社会で、よりよく生きることができたとと思います。

しかし、時代は大きく変化しました。知識が、外部記憶化されるようになったのです。人類が得た知識は膨大なものになり、最先端が数えきれないくらいに枝分かれし、それぞれの最先端の研究をしているのは、数人という時代になりました。この知識をすべて、生徒に伝えることはできません。教科書が薄くなったとか、教える内容が減ったとか、そういうことは、さしたる問題ではありません。すべてを伝えることができない以上、伝える内容を選ばなくてはなりません。たとえば、高校理科において、原子核のまわりを電子が円軌道をえがいて回っていると教えます。このことは、100年以上も前に、誤りであることが分かっていました。なぜ誤った知識を伝える内容としているのか。それは、その方が原子というものを理解しやすいからです。原子の本質よりも、この世の物質が原子からできているという概念を理解させることの方が、大事だからです。

その昔、大学教授は、膨大な知識を有している必要がありました。たとえば、学生が行きづまったときに、

どの本を読めばいいかを示すために。つまり、昔は、知識を検索できなかったのです。今は、違います。インターネットの普及により、誰もが知識を検索できるようになりました。知識が、外部記憶化されているのです。ですから、この知識の検索の仕方と活用の仕方をマスターしなければなりません。英語で検索できるようになれば、さらに多様な知識を手に入れることができます。

私たちは教育者として、生徒を育てなければなりません。ますます変化していくであろうこれからの時代に適応できる生徒を、育てなければなりません。私たちの経験してきた時代は、過去のものです。誰も想像できない時代を生きていく生徒のために、教育をしなくてはなりません。そのためには、どのような教育をすればよいのでしょうか。

これからの時代を生きていくのに必要なものを、文部科学省は、「思考力」「判断力」「表現力」と言っています。これは、今、世界中で考えられていることです。「正しく考える能力」や「気づく能力」はもちろんのこと、「知識を検索する能力」「知識を活用する能力」「話し合う能力」「プレゼンテーションの能力」等々、様々なものが必要になってきます。一斉講義型の授業で、これらの能力を身につけさせることができるのでしょうか。実は、今までの一斉講義型授業で、一番成長したのは、教師です。乱暴な言い方ですが、一斉講義型授業で高まったのは、教師のプレゼンテーション能力です。

一斉講義型の授業だけでは、これからの時代を生きていく子どもたちが苦勞します。子どもたちが、学校で長期間にわたり勉強しても、過去の価値観に見合った能力を身につけたのでは、卒業時には、時代遅れになってしまうのです。教育は未来のためにあります。子どもたちの幸せを願い、人類の幸せのために教育はあると信じています。そのために、一斉講義型の授業だけではなく、アクティブ・ラーニング型授業に取り組まなくてはならないのです。

3 アクティブ・ラーニング型授業とは何か

「アクティブ・ラーニング」というのは、生徒の状態のことだと考えます（文部科学省の見解ではありません）。カタカナ表記なので、ぴったりくる日本語がないのかもしれませんが、「積極的な学び」「能動的な学び」「主体的な学び」ということになります。つまり、生徒が積極的に学んでいる状態のことを言います。そこで、「アクティブ・ラーニング」の状態になるようはたらきかける授業を「アクティブ・ラーニング型授業」と言います（以下「AL型授業」と表記します）。

一斉講義型授業においても、先生によってやり方が異なります。ですから、AL型授業も、先生によってやり方が異なります。様々なやり方が研究されていますので、単元によって変えてみたりしながら、自分の得意なやり方で授業をすればよいのです。

ここで、注意しなければならないことは、「AL型授業は、形態ではない」ということです。グループ学習やコの字形の机配置をすれば、AL型授業になるわけではありません。「アクティブ・ラーニング」の状態になっているかどうかです。

4 アクティブ・ラーニングの判断

生徒が「アクティブ・ラーニング」の状態であるかどうかは、生徒が思考しているかどうかから判断します。ベテランの教師は、一斉講義型授業をしていて、生徒が理解しているかどうか分かります。新米教師は「いいか?」「分かったか?」を連発します。同じことで、AL型授業の経験を積めば、生徒が思考して

いるかどうか判断できるようになります。しかし、AL型授業にこれから取り組むわけですから、とりあえずの判断基準は、「生徒が説明をしている」かどうかでいきましょう。自分以外の人に理解させようと話をしているとき、脳はアクティブな状態にあると思われます。一人の生徒が、プレゼンをする。アクティブなのは、その生徒だけです。ペアになって、一方が説明をする。クラスの50%がアクティブです。つまり、生徒一人ひとりが授業中に説明をする機会が、どれだけあるかということに、気をつけることにしましょう。一番長く話していたのは先生だったというのが、最悪のAL型授業です。

もちろん、アクティブな状態で聴くということもあります。これは、ディベートのように質問や反論を意識していたり、後で自分が説明しなくてはならない場合です。そのような仕掛けを、教師がしなくてはなりません。たとえば、映画を見ていて、その映画にのめり込んでいるだけでは、アクティブではありません。見終わった後で、友人と映画について語り合う。それこそがアクティブです。

ただし、生徒が活発に活動していても学びがなくては、単なる「アクティブ」な活動です。それは、学習ではありません。ここが難しいところですね。

5 AL型授業の成績評価

今までは、テストの点数によって、成績をつけてきました。では、AL型授業においては、どのようにして成績をつければよいのでしょうか。実は、これについては、「これだ!」というものがありません。「グループへの貢献度」「プレゼンの仕方」「事前学習の質」等々、全てが評価対象です。

「ルーブリック評価」というものがあります。それぞれの項目における達成度を表したものです。生徒につけさせたい各能力の評価基準を生徒に示すことによって、どのように活動すべきかが生徒にも理解できるので、非常に有効だと思われていますが、ある程度の形がととのってくるまでに、数年かかるでしょう。

さらに付け加えますと、このレポートの最後に記載してある【おすすめ参考文献】の『「主体的学び」につなげる評価と学習方法 —カナダで実践されるICEモデル—』に、「ICE」(アイス)という考え方が載っています。一般的なルーブリックは、量で評価しますが、ICEのルーブリックは、質で評価します。

ICEとは、学びの深化を表したものです。つまり、I→C→Eの順に学びのレベルが上がっていく(深化していく)のです。

I (Ideas) : 基礎知識 一問一答式の答	(行動) 整理する	区別する	計算する	暗記する等
C (Connections) : つながり 関連付け	(行動) 分類する	再構成する	統合する	等
E (Extensions) : 拡張 応用	(行動) 分析する	評価する	推定する	計画する等

たとえば、「壊れたトースター」に関するレポートを評価します。

Iのレベル: どこが壊れているかを見つけ出し、その個所がいくつも記述してある。これは情報(知識)を理解している段階。

Cのレベル: 壊れている箇所が、他の箇所にどのように影響を及ぼしているかが記述してある。これは、複数の情報が関連づけられている段階。

Eのレベル: 壊れている箇所や影響を述べ、どうすれば直るか、また、どうすれば壊れなかったのかが記述してある。これは、分析し提案や計画にまで理解が進んだ段階。

このように、どの段階まで進んでいるかという観点から、評価することができるのです。

「月刊 高校教育」2015年11月号に、福井県立若狭高等学校の渡邊久暢先生が『生きて働く質の高い学力』を培うアクティブ・ラーニング」というレポートを発表されています。そこに、みごとにルーブリックが示されています。興味のある方は、調べてみてください。

まあ、しかし、今すぐここまでは難しいので、とりあえず、今まで通りのテスト（大抵はIのレベル。応用問題がCのレベル）をして、それを中心に成績をつけましょう。ただ、平常点として、今でも先生方は、何らかの操作をしているはずで、この平常点に「グループへの貢献度」や「振り返りシートの内容」等を加味すれば良いでしょう。ペーパー試験を実施していない実技の授業をしている先生の評価方法が、非常に参考になります。

新しいことに取り組むときは、自分と同じ経験をしている人と話をするだけではなく、違う経験をしている人の話を聞くべきだと思います。異質な集団で話し合うこと、そのことによって、新しいものが生まれます。実は、これがAL型授業のねらいでもあります。

6 AL型授業に求められる教員の能力

★一斉講義型授業以上のプレゼン技能

授業においては、生徒の思考に必要な知識、また、どのように行動するべきか、ということのを的確に伝える必要があります。AL型授業において、教師が声を出す時間は、3分の1程度だと思います。ですから、一斉講義型授業を50分おこなっていたのなら、同内容の知識を15分程度にまとめて伝える必要があります。伝達しなければならない知識量を減らすのではないのです。15分に凝縮するのです。そうすると、板書する時間やノートをとる時間が足りないので、パワーポイントを使ったり、掲示物を作ったり、プリントを配布するというようなことが必要になります。

★全生徒が活動できる課題の選定

AL型授業において、何もしないとか、寝ているとか、そういう生徒はいなくなります。生徒の能力に応じて、すべての生徒の能力が高まるのです。課題を解決した生徒は、その課題解決の仕方を、他の生徒に説明することが、「アクティブ・ラーニング」です。また、個別に考える時間であれば、能力の高い生徒のために、発展課題を用意しておく必要もあるでしょう。

★振り返りシートの作成

生徒が主体的に学ぶわけですから、学習は生徒自身のことです。「教師が何を教えたか」ではなく、「生徒が何を学んだか」です。それを自分自身で確認をする時間を、必ず確保してやる必要があります。振り返りシートに記入するということは、自分自身を見つめ、自分の考えを言葉で表現することです。これが「アクティブ・ラーニング」であり、生徒の成長につながるのです。効果的な振り返りシートを模索する必要があります。

★ファシリテーターとしての役割

ファシリテーターとは、会議の進行役です。司会者、会議の促進者等の意味です。生徒の能力が低いから、生徒が話し合いをしないのではありません。話し合う目的や内容が、明確に示されていないから、生徒が話し合わないのです。生徒が話し合わない原因は、その生徒に見合った課題を的確に明示できない教師の責任です。また、話し合いが行きづまったときに、話し合いが発展するよう、適切に話しかけたり、適切な質問をすることが必要になります。

うまく話し合いにならないのは、話し合いの仕方が分からない場合もあります。話し合いの仕方を教えることも大切です。「・・・だから、・・・となります」等、必ず理由を言うだとか、「・・・に加えて、・・・だと思えます」等、誰かの意見につけ加えるというように、話し合いで使用する定型文を提示することが必要かもしれません。

★コーチングの手法

選手がベストパフォーマンスを発揮するよう、コーチはサポートします。AL型授業は、まさしくそれです。生徒の能力を高めるために、授業があるのです。教師が教えるのではなく、生徒が知識をつかみ取り、成長するようサポートしなくてはなりません。「傾聴」「承認」「質問」のスキルが必要になります。

★適切なグループ分け

AL型授業では、グループでの活動が増えると思われれます。このグループの人数は、様々な研究から4～6人がよいと言われています。しかも、そのメンバーは、異質な方がよいようです。成績や性格、考え方等がばらばらになるように構成するのが、教師の仕事になってきます。

★多様な仕掛けの準備

一斉講義型授業において、ベテラン教師は、生徒の理解度に応じ、説明方法を即座に変更します。同様に、AL型授業において、生徒が「アクティブ・ラーニング」になっていないと判断したなら、即座にべつの仕掛けを実行しなくてはなりません。これらも事前に準備しておく必要があります。ですが、これは教師が経験を積むことによって身につけていくことだと思います。うまくいかない経験を早く積むことです。「うまくいかない」ということは、失敗ではなく、「そのようなやり方はよくない」ということが分かることです。理屈ではありません。まず、経験してみましよう。

7 AL型授業のベース

AL型授業における生徒同士の関係は、部活動のチームにたとえられるかもしれません。クラスの全員がレギュラーです。クラスの全員で、自分たちのチーム能力を向上させるのです。サッカーか何かの集団スポーツだとしましょう。メンバーはぎりぎり。上手な選手もそうではない選手もいます。ゲームをするには、上手な選手がそうではない選手をバックアップしなければなりません。

今、学習能力の劣っている生徒がいるとします。その生徒は、自分が劣っていることを知られたくないと思っています。先生が課題をするように指示をしても、何もしません。それに取り組んで答えを出せなかったら、クラスの仲間に劣っていることが知られてしまうからです。課題が解けることに価値があると、教師

も生徒思っているから、そうなります。その価値観の中では、劣っている生徒は行動できなくなります。

AL型授業では、劣っている生徒が、そのことを隠さなくてもよい環境をつくらなくてはなりません。先ほどのチームの話です。誰が何に対して弱いかを、皆が知っていて、初めてバックアップできるのです。分からないことを分からないと言ってくれないと、バックアップのしようがないのです。

「分からないから、教えて」と言う。それに対して、見下すのではなく、「分からないから理解しようと努力しているんだ」と皆が認め、その理解を助ける行動をする。クラス全員がお互いに成長することを助ける。それがAL型授業です。競争ではなく協同なのです。（※「協同」か「協働」かは、研究者によって定義が異なっているようですが、ここでは無視します。）

仲が良いとか悪いとか、好き嫌いは、関係ありません。社会に出れば、初めて出会った人とチームになり、協力しなくてはならないのです。どのような人とであっても、お互いを高めるために協力をする。このことは、生徒に徹底しておかなければなりません。

AL型授業に取り組もうとしない生徒は、どうするのか。場面緘黙等で、参加したくてもできない生徒はどうするのか。これも、一斉講義型の授業と同じことです。授業を聞かない生徒をどうすればいいのか、寝ている生徒をどうすればいいのかと、教師として考え続けてきたはずです。ですから、AL型授業にしたときに、新たな問題が生じてくるのは当然で、それをどうしていけばいいのかを、これから私たちが考えていかななくてはならないのです。

「クラス全員の成長がクラス全員の目標」「クラス全員が自分の味方」「安心して何でも言えるクラス」、そういう信頼関係のあるクラスを作り出す必要があります。人の話は、しっかり聞く。人格を否定しない。自分を認めると共に他者を認める。そういうことが、道徳教育であり人権教育です。それをAL型授業なら、おこなえるのです。逆に、道徳教育や人権教育になっていないなら、AL型授業ではないのです。

8 AL型授業の実際

①課題の提示

◆何を理解するための課題なのかを明確に示す。

- ・何がわかるのか、わかるとどうなるのかという具体的は内容を示す。
- ・日常生活と関連付けたりして、生徒の学習意欲を引き出す。

◆個人ではない、クラス全員の目標を確認する。

例：全員が基本問題を解けるようになる。

全員がこの定義を説明できるようになる。

(ICEの視点からレベルを定めることも可)

◆学習スケジュールの表示

- ・単元における本時の位置を確認する。
- ・分刻みのタイムテーブルを示す。

②課題解決のための情報提供

- ・講義またはプリント等の資料により、課題解決に必要な知識を伝達する。

③個人学習

④グループ学習

⑤全体交流（必要に応じてグループの発表等）

⑥振り返りシートの記入

記入項目例：「本時の課題」「自分の考え」「グループでの考え」「全体での考え」「自分の結論」
「充実した学習ができたか」「グループに貢献できたか」「さらに追究したいこと」等

多くのAL型授業が、このような①→⑥の流れになると思われます。④⑤あたりに様々な形態がとられることとなります。決して外すことのできないものは、①と⑥です。行き当たりばったりの授業はできませんし、突然の時間短縮授業にも対応できなくなるかもしれません。特に、⑥が大切で、一斉講義型の授業をして、⑥だけ取り入れるということから始めてもよいと思われます。必要に応じて、教師が、プレゼン評価や今後のアドバイスをすることになると思われますが、最後に教師が正解を述べてしまうと、生徒はその正解だけを得ようとし、AL型授業への取り組みがおろそかになると思われます。教師が正解を述べるのではなく、生徒たちが全員正解にたどり着けるよう授業を組み立てるのです。

振り返りシートは、教師が読んで、コメントを記入して返却するのがベストだと思われます。そうすると、教師は、授業の準備の時間だけでなく、授業後に毎回振り返りシートを読む時間が必要になります。しかし、AL型授業においては、③の時間があるので、そういう時間に振り返りシートのチェックをしても良いかもしれません。これからAL型授業を実践していくうちに、いろいろな工夫がなされていくのだと思います。

9 グループ学習等の方法

いくつかのパターンを記述します。やりやすいと思えることから、取り組んでみてください。

(1) Lite (ライト Learning in teaching)

- ①定義や結論などを教師が説明する
- ②ペアになって、一方がその定義等を説明する
- ③役割を交代する

<実践例>

「公開市場操作」とはどういうことかを教師が説明する。

近くの人とじゃんけんをさせる。

勝った方が負けた方に説明する。

交替して、負けた方が勝った方に説明する。

※聞いているだけでは、記憶に残りません。誰かに説明することによって、アクティブな学びになります。簡単な方法ですが、効果有りです。

(2) Think-Pair-Share

- ①教師が課題を出す（多様な答えがでるもの）
- ②自分の考えを紙に書く

- ③ペアになって、自分の考えを説明する
- ④相手の考えで納得できるものを自分の考えに加える
- ⑤別のペアと一緒にあって、4人で話し合う

<実践例>

何かの作品の解釈をその根拠も含め、記述させる。

ペアになって、お互いに説明をする。

自分が気づいていなかったことを、自分の考えに加える。

※一斉講義型授業だと、教師が自分の経験を語る人が多いのですが、この方法なら、生徒の数だけ話題がでます。生徒全員の意見を、生徒全員が必ずしも知る必要はありません。自分一人の経験やアイデアだけでは、発想が限られていることを実感させ、自分の考えを深めるためには、他人との話し合いが必要であることを経験させることができます。

(3) Peer response (ピア・レスポンス peer : 同僚 仲間)

- ①各自が簡単なプレゼン用レポートを書く
- ②お互いに相手のレポートをざっと読む
- ③一方が自分のレポートのアウトラインを説明する
- ④聞き手は説明者に確認をしながら、そのアウトラインを自分の言葉で説明し直す。
- ⑤続けて、聞き手は、アウトラインの良いところや改善点を述べる
- ⑥役割を交代する
- ⑦各自が自分のレポートを書きなおす

(4) Jigsaw (ジグソー : 電動のこぎり ジグソーパズルのピースを集めて全体を理解する)

- ①教師が、4つの課題をだす(4人グループの場合)
- ②各グループのそれぞれの課題担当(専門)を決める
- ③各グループを解体して、課題担当別に集まる
- ④課題担当別で、それぞれの課題について学習する
- ⑤元のグループになり、それぞれの担当がメンバーに説明する

<実践例>

課題 : 「なぜ薩長が討幕の中心となったのか」を全員が説明できるようにする。

「薩摩藩」「長州藩」「幕府」という3つのグループに分ける。

「薩摩藩」のグループは、その時代の「薩摩藩」の動き、思想を理解する。(他グループも同様)

- ・教科書等から、「薩摩藩」に関することを書きだす。
- ・インターネットで調べる。 ・プリントの穴埋めをする。 等の方法

「薩摩藩」「長州藩」「幕府」の3グループを解体し、それぞれの知識を持った者が最低1人は含まれる新しいグループを作る。

それぞれが知識を説明し、新しいグループで課題の解答（穴埋めも可）を考える。

※自分の担当分野は、他のメンバーの質問に答えられるよう、学習を深めておかなければならない。

課題をどのように分割すればよいかを考えるのが、教師の仕事となります。

また、定期考査等のテスト返却時に教師が解説するのではなく、テスト内容をいくつかのパートに分け、それぞれのパートごとの解答・解法を対応するグループで理解させ、そのグループを解体し、すべてのパートが集まる新グループをつくり、新グループ内で解答・解法を教え合うということもできるでしょう。

(4) LTD (Learning Through Discussion)

これは、とてもすばらしい手法だと思います。必要に応じて研究してください。

内容については、【おすすめ参考文献】に記載してある『実践・LTD 話し合い学習法』 安永悟（ナカニシヤ出版）を参考にしてください。

(5) 一斉講義型授業におけるアクティブ・ラーニング

たとえば、生徒が興味をもつよう、質問するという手法が考えられます。次から次に答えが知りたくなるよう、なぜ、なぜ、と、どんどん深めていく。テレビのクイズ番組等が参考になるかもしれません。

また、「あなたが織田信長だったら、このとき、どう考えてどう行動したか」という問いかけも、おもしろいかもしれません。考えること、理解すること、そのために知識が欲しいと思わせること。なぜだろうと追求していくうちに、自然と知識が蓄えられていく。そういうことであるならば、グループ学習にしなくてもよいでしょう。

ただし、注意することは、「先生が答えない」ということです。発問するのは先生ですが、考えたことはクラスみんなに向かって説明させるのです。答えの分かっている先生が答え合わせをするのではなく、クラスみんなが答え合わせをするのです。反対意見が出てくれば、なおよいでしょう。クラス全体の討論になればよいのです。ここで、先生ファシリテーターの手腕が問われることとなります。

10 おわりに

一斉授業をしてきた中で、「アクティブ・ラーニング」の状態になっていたことが、たくさんあったのではないのでしょうか。これからは、「アクティブ・ラーニング」ということを意識して、積極的に授業を展開していけばよいのです。

進学指導を重視しているところは、進度が遅くなり、教科書を終われないのではないかと不安がられます。実は、数学や物理などにおける手法は、ほとんど確立されているようです。そのひとつが、産業能率大学教授である小林昭文氏の高校物理の授業だと思います。小林先生は、「高校物理をアクティブ・ラーニング型授業で行うと、進度が速くなる」と言っています。まさしく、やり方なのでしょう。たとえば、必ず理解しないと問題が解けない定義などは、生徒が必ず自分で理解するので、説明を省略してもかまわないのです。

今までなら、徹底して時間を使い教師が説明していたところです。

ただ、私はいつも思っています。世界史の教科書すべてを授業でやりきっている学校が、日本にあるのだろうか、と。だから、どの教科においても、必ずしも教科書を終わらせる必要はないのではないか、と。

地歴科の先生から、AL型授業はやりにくいというような声をききました。私は地歴の専門ではないので、単なる私の考えですが、地歴の授業では先生が語り部となって物語を話し、生徒に知識を伝達しているのではないのでしょうか。もし、そうだとすると、AL型授業という形態が、あまりにもかけ離れているように感じているのではないのでしょうか。心配いりません。地歴のAL型授業のパターンを、これから増やしていけばよいのです。たとえば極端なことですが、歴史の授業だとして、縄文時代から順にやらないと現代社会が理解できないなどということはないわけですから、奈良時代のある出来事を学習して、明治時代に移っても構わないのではないのでしょうか。それぞれの授業のテーマは、大学入試の記述問題でどうでしょう。記述問題に解答するためには、多様な知識を関連付ける必要があります。これこそ、AL型授業が得意とするところではないのでしょうか。

これとは逆に、単に覚えなければならないことについては、どのようなAL型授業ができるのでしょうか。たとえば、化学の周期表。水兵リーベ・・・、H、He、Li・・・というやつ。これは、グループに分けて、「この周期表を簡単に覚える方法を考え出し、発表しなさい」という課題を与えてはどうでしょうか。覚え方など、インターネットにあふれています。このやり方ならば、一時間で全員が覚えてしまうかもしれません。

大学入試が、変わり始めています。例えば、試験会場が大学図書館で、ここの蔵書を使ってレポートを書きなさい、というようなものです。ディベートやプレゼンが入試になるかもしれません。つまり、今までの、一斉講義型の授業だけでは、大学入試にも対応できなくなるのです。

AL型授業なんぞ、やってみたら、何とかできます。できない理由、やれない理由、やらない理由はいくらでも見つかります。それよりも、「どうすればできるか」に焦点を絞ってください。できない理由を探すより、ずっと楽しいことだと思います。まず、私たち教員集団がアクティブにならないことには始まりません。新しいことに取り組むのです。わくわくしながら、やってみませんか。

【おすすめ参考文献】

『協同学習入門 基本の理解と51の工夫』 杉江修治（ナカニシヤ出版）

*超オススメ!!!協同学習の基本的な考え方がわかります。

『アクティブラーニング入門 -アクティブラーニングが授業と生徒を変える。-』

小林昭文（産業能率大学出版部）

*物理の授業での実践方法が分かります。

『クラスが元気になる「学び合い」スタートブック』 西川純（学陽書房）

*どちらかというと、小中学校向けですが、参考になることが、たくさんあります。
勘違いして、生徒に丸投げしてはいけませんよ。

『先生のためのアイデアブック ー協同学習の基本原則とテクニックー』

著者：ジョージ・ジェイコブズ マイケル・パワー ロー・ワン・イン

翻訳：伏野久美子 木村春美 監訳：関田一彦 （ナカニシヤ出版）

*小学生レベルからの様々な話し合い学習の方法がわかります。

『「主体的学び」につなげる評価と学習方法 ーカナダで実践される ICE モデルー』

原著者：Sue Fostaty Young Robert J. Wilson

監訳：土持ゲーリー法一 訳：小野恵子 （東信堂）

*学習の組み立て、評価の仕方が分かります。

『実践・LTD 話し合い学習法』 安永悟（ナカニシヤ出版）

*高度なAL型授業の方法が分かります。